愛着ある器、補修で復活

金繕いや研磨で新たな味わいに

切断した上部（手前右）の分だけグラスの背は低くなった。「これはこれで面白いですよ」と、出来栄えに満足げな菊池さん

愛着のある器は壊れても捨てがたい。戸棚の奥に一つ二つとしまっていないだろうか。泣く泣く捨ててしまった器は、余計に記憶に残ることも。高価な茶道具や骨董（こっとう）でなくても、気に入った器をきちんと直す方法が分かれば、器づかいの楽しみが一層増してくる。

部屋の一角に、縛われた器や修理を待つ器がいくつも並ぶ。東京都杉並区の中澤和子さんが営んだ器の補修をもっぱらにしたのは二〇〇〇年。ギャラリーを経営する知人から、金繕い（きんつくろい）の教室に誘われたのがきっかけだった。

金繕い、つまり金継ぎとは日本の伝統的な器の繕い方法だ。漆を使って接ぎ、そこに金を施す。陶器やガラスのものも、これで修復が可能だ。漆を使うさまざまな中澤さんはその方法を知ってはいたが、手間や費用がかかるため敬遠していた。「壊れた器を捨てるのは忍びない」と聞いていた、どこに頼むのかも分からなかった」と、振り返る。そのため結婚祝いにもらった夫婦（めおと）茶わんも、壊れた片方だけを捨てた苦い経験がある。

金繕いの教室で学びながら受けた器を直せるようになってからは、好きな器を修復することもなくなった。大事そうに抱えてくる人の姿は、まるで新しい器を買っているかのようだ。「喜ばれる手仕事なんだなと実感しています」と中澤さん。

金繕い教室（東京・世田谷）には、自宅の器を直したい人が通う。「本繕い」と呼ばれる伝統の修理方法は工程のすべてに漆を使うため、乾燥に時間がかかり扱いも難しい。教室を運営する平澤白水さんは、工法は伝統を踏襲しながら、南方系の漆とエポキシ系のパテを用いることで、時間と費用を軽減。「一般の人が簡単に扱えて、家庭の器を自分でも繕えるよう考えた」と話す。小さな欠けやヒビは、工程に合わせた三回の受講で繕いが完成する。

グラスには別の修理方法もある。江戸切子の工房であるグラスフォレスト（東京・大田）では、約二十年前から修理を受けている。修理のためのカットや磨きなどに、切子の機械が使えるためだ。自社製品は修理できることを伝えて販売を

金繕いした器（中澤さん提

ときめきインテリア

繊細な和傘のあかり

紙の仲間 ⑤

中央から放射線状に広がる竹が繊細な線を描く。和紙を通して、柔らかな光が空間を照らし出す。「古都里―KOTORI―」は、江戸時代後期に創業した京都の和傘（かさ）メーカー、日吉屋が開発した照明のシリーズだ。特徴は、和傘の機構を活用したつくりにある。

ろくろと呼ぶ根元の留め材から竹の小骨が放射線状にのび、和紙を張った外周の親骨を支えている。ろくろに納まる小骨の先端は細く削り取られ、親骨とつながる側は二又に分かれる。親骨は、小骨を受ける接合部に竹の節が来るよう割り出してある。骨と骨はひもで留める。和傘職人が作るシェードは、合理的な竹の使い方や細かな手作業に伝統技術が生きている。

シェードは取り外しでき、傘をすぼませるように筒状に折り畳める。シェードを設置する際は直径六㌢の薄い金属を縁きみ、照明器具を納める金属枠のネジをろくろに差し込んで留めるだけ。ネジを回していくと円盤状の金属が小骨を挟み込み、シェードは円筒状に開いた状態で固定される。放射状の小骨だけでシェード全体の形を支える仕組みは、実にシンプルだ。

製品は、白い機械すき生朝紙を用いた写真のニュースタンドシリーズのほか、越前五朝紙や五箇山和紙を使ったハイグレードシリーズもある。

後者はナチュラル、黒、赤、紫や切り絵のシェードをそろえ、着せ替えができるようにしている。シェードを折り畳むと筒状になるので、保管場所も小さくて済む。「掛け軸のように、季節によって付け替えるといった楽しみ方もしていただければいい」。日吉屋の五代目、西堀耕太郎氏は様々な使い方を期待する。

「和室にも洋室にも合うような普遍的で機能性を備えたモダンデザインを目指した」（西堀氏）という古都里は、二〇〇六年十二月に最初のシリーズが発売された。〇七年度のグッドデザイン賞中小企業庁長官特別賞を受賞。〇八年二月に独フランクフルトで開催された国際見本市「アンビエンテ」に出展した際は、百社近い問い合わせを得るなど注目を集めたという。

かつて一般に使われていた和傘の技術とその美しさが、現在の日常生活のなかで生きる。古都里は、伝統工芸に新しい居場所を提供する試みでもある。

（ライター　守山　久子）

古都里―KOTORI― 手ごろな価格のニュースタンダードタイプ（写真左）は100㍗電球2灯式どんろで1万9950円。黒、赤、紫などのシェードをそろえたペンダントライト（6万900円）、フロアスタンド（9万3450円）も。問い合わせは日吉屋（☎075・441・6644。http://www.wagasa.com/）

暮らしのアクセント

安心カーライフ ㊽

子どもを守る

希望に燃えた新入生が学校に通う季節になった。子どもを事故から守るためには、交通教育や道路環境の整備が重要。もちろん、運転するドライバーの意識向上も欠かせない。ルールを守り、他人を思いやる運転を心がけよう。

スクールゾーンは子どもの交通安全の特別地区にスターを中心に、半径五百㍍が、それることも時間帯禁止する増えた。でも事故のは出折時の歩行者横の安全となる徹底だ。進入禁ないドラ学路を抜